



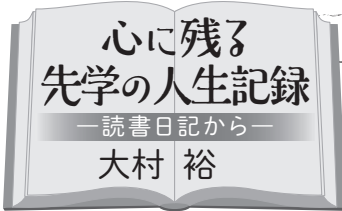
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.225
2022.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第28回

森本ミツギ「編輯所日記」に見る森本家の日々

「悲劇の天才考古学者」「弥生式原始農業の提唱者」として、未だに人気の高い森本六爾に関する伝記・小説はいくつもあるが、その中でも森本の愛弟子・藤森栄一による『二粒の粉』（河出書房 1967年）は、師への熱い思いとその美しい文章とが相俟って、読者の心をとらえずには措かない。この本を通じて森本に心を惹きつけられた研究者は多い。今さら、森本を主題にした伝記や小説を紹介したところで新味は全くないので、ここでは森本の妻・ミツギが機関誌『考古学』3～6巻に書き綴った標記の文章をたどり、森本家の日常の一端を復元してみたい。

本題に入る前に、「森本六爾」を知らない若い考古学徒や考古学愛好家のために、彼の生涯を簡潔に紹介しておこう。森本は1903年に奈良県にて出生。生家は裕福な農家であった。地元の旧制・畝傍中学を出た後、尋常小学校の代用教員をしながら考古学研究に熱中。京都帝大の梅原末治のもとに足しげく通い、指導を受ける。種々の理由により梅原との交流が断たれると、東京帝室博物館の高橋健自を頼って上京。高橋の斡旋により東京高等師範学校校長の三宅米吉の副手となる。ここに在職中、盟友坪井良平と邂逅。坪井らと「考古学研究会」を創設する（1927年。後年、東京考古学会に改組）。この研究会の遠足会（1928年2月）において、浅川ミツギと出会い、急速に惹かれ合う。そして出会ってからわずか一か月後に鳥居龍蔵夫妻の媒酌により結婚に至る。ちなみにミツギは東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）を卒業した才媛であった。学歴不釣り合いの結婚に、浅川家の反対は強かったようだ。森本が三宅米吉の急逝（1929年11月）に伴い東京高師を退職すると、東京女学館の数学教師であったミツギの収入だけで家計が支えられることとなる。以後、森本は亡くなるまで世間的には「素浪人」であった。焦った森本は1931年1月にフランスに私費留学する（その目的は「箔」をつけて職を得るためだと直良信夫に説明している）。渡航費用や、かの地での生活費の多くも、ミツギの尽力によって捻出されたものであった。森本は無理を重ねた洋行によって肺患を悪化させ、予定の滞在期間を繰り上げて帰国。その病はやがてミツギにも伝染する。森本より先に重患となったミツギは、1935年3月を以て勤務先の東京女学館を退職。収入の途を絶たれた森本家は貧窮のどん底にあえぐことになる。この年11月にミツギは森本の故郷で死去。31歳の若さであった。そして妻を追いかけるようにして森本も32歳10か月の若さで寂しくこの世を去ったのであった（1936年1月）。弟子の杉原荘介は、泣きながら森本の母堂と骨を拾ったと『二粒の粉』の帯に書いている。

「編輯所日記」は、森本が主宰した東京考古学会の機関誌『考古学』の末尾に掲載された森本ミツギの手になる日記である。1932（昭和7）年11月1日から始まっている（『考古学』3巻7号）。それは森本六爾が遊学中のバリで肺の病気を悪化させ、傷心の帰国をした8か月後であった。この11月1日、ミツギは森本と「西荻窪石川先生」のもとに病氣治療に行っている。ちなみに「石川先生」は、「霊動会」の主宰者で、

「西荻窪」は霊動会の道場が所在する場所と推定される。そこでは「心理学精神療法」が施術されており、近代医学に見放された病人たちの最後の拠り所であった。この頃、森本家は東京渋谷・羽沢町の一角にある借家に住んでいた。11月9日の記載に、「書齋の硝子戸越しに見下ろすたに（谷）の紅葉霜に冴えて赤し。遠く霧に隠れ、霧に顕るるあたり更に妙なり」と、錦絵を想わせるような見事な描写がある。今では想像もつかないような美しい自然が残った土地に森本らは暮らしていたのであった。夫の病状に一喜一憂しながらも、この風光明媚な土地の生活に、ミツギは満足していたのではなかろうか。12月28日には「『数学』第二回配本あり」という記述が注意を引く。発行年から推定すると、これは『岩波講座 数学』（第二回配本 1932年）であろう。岩波書店が最初に出した数学書シリーズで、『岩波講座 現代応用数学』と並んで当時の数学書の双壁であったという（『ウィキペディア』による）。家事・育児・機関誌『考古学』の編集や庶務を一身に担いながらも、職業上の研鑽を忘れないミツギであった。この日記の中には多数の婦人の来訪の記述がある。ミツギの勤務校の生徒の母親か家庭教師に向かっている良家の母親たちと想像する。その他、考古学関係では浅田芳郎、丸茂武重、谷木光之助、大場磐雄、山内清男、沼田頼輔、両角守一、藤森栄一、甲野勇、江馬修、鈴木尚、森貞次郎、小林行雄、直良信夫、片倉信光、藤澤一夫、杉山寿米男、湊農、斎藤房太郎、斎藤武一、濱田耕作、島村孝三郎などが訪問している。学史に名を残している錚々たる人たちが目立つ。これに加えて出版社の編集者・印刷所の社長の訪問も目に付く。日々届く書簡や寄贈図書は枚挙に暇がない。晩年になっても森本は決して「孤独」ではなかったのだ。

家庭人としての森本の動向は如何であったろうか。松本清張の『断碑』では、お互いに顔が腫れ鼻血を出すほどの夫婦喧嘩をしている場面が描かれているが、森本の優しさに言及していないのは遺憾である。「鑑、（幼稚）園に馴れず。父に馴れて終日其の側に遊び暮らしたれば、半日を園に送るは無理なるべし」（1933年4月13日）とあり、息子の鑑には良きパパであったことが偲ばれる。後年鎌倉に転居した折には「晴れたれば鑑を喜ばせんとて主人出京」（1935年3月18日）という記事もある。前後するが、頑健な体を持っていたミツギは、1933年11月16日に突如発症。以後体調不良を訴える記述が目につくようになる。病床に伏せるミツギを慰めるため森本は、「夜はわが枕元にて、『聖家族』を読み聞かせらる」（1935年2月25日）、「主人側にて『レモン』読み聞かせらる」（同年2月27日）と優しい一面をのぞかせている。明治生まれの男にしては妻や子に対してとても情愛あふれる夫であり父親であった。1935年6月、森本の実家からの支援を期待して、六爾たちは奈良県三輪町に転居。ここでもミツギは「日記」を書き続ける。「熱苦しき家にかがみぬて思ふ事は幼き日のたくましさなり。云々」という記事がミツギの絶筆であった（1935年8月4日）。

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第28回) 大村 裕 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第3回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第218回) 生山優実 …3
■考古学者の書棚「ネアンデルタール人は私たちと交配した」 浪形早季子 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第3回)

山本 暉久

3. 大学入学、考古学の始まり

1965(昭和40)年4月、早稲田大学第一文学部史学科國史専修に入学した。当時は入学とともに専攻の学科に在籍することとなっており、入学試験も専修別に合格点が決められていた。「國史」などという、古めかしい専攻名であったが、古代～近現代史までを学ぶことができ、日本史全体の幅広い知識を吸収できることが気に入った点であった。肝心の考古学分野は、当時はあまり重視されていなかった。入学試験は、筆記試験が第1次で、その合格者が面接の第2次試験に進むスタイルであった。今でも鮮明に思い出すが、面接の口頭試問のさい、考古学を志望したいと熱く語ったところ、「王朝交代説」で知られる(もちろん、当時は知らなかったが)古代史の大家、水野祐教授が面接官で、「今年は考古学を志望する学生が多いなあ」と言われた。入学して判ったのだが、水野先生は考古学がお嫌いのように、灰皿のようなもの(土器を指す)をこねくりまわして役に立たないとのこと託宣で、一説によれば、かの杉原荘介に馬鹿にされたことを根をもって考古学が嫌いになったらしいとのことだが、もちろん真偽は定かではない。余談だが、入学後、水野先生の講義を受けて、レポートが課せられたのであるが、その課題は「わが説を批判せよ」であった。そこで滔々と考古学の古代史に対する寄与について述べつつ、水野学説に反論(もちろん反論にもならなかったかもしれないが)したところ、成績評価は案の定「可」をいただくことになってしまった。

さて、文学部では、櫻井清彦先生が考古学を教えているとのこと、入学前に知っていた。なぜかというと、私の2才年上の姉が、当時、同じ第一文学部のドイツ文学専修に在籍しており、姉から櫻井清彦という先生が考古学を担当していることを教えてもらったからである。姉はわざわざ、授業のあとで、直接櫻井先生に、弟が考古学を志望していることを話したところ、先生曰く、「ほかの大学を志望したら」などと言われたと教えてくれた。なにか肩すかしの気持ちがしたことを憶えている。そんな経緯もあったけれど、入学してすぐ、新入生歓迎のガイダンスのときに、1年先輩の十菱駿武さん(山梨学院大学教授)の案内で、文学部校舎のスロープを上がってすぐ左側にあった「史学科資料室」(文学部で考古学を教える非常勤講師の控室で、同時に考古学を専攻する学生のたまり場となっていた)に案内され、そこで櫻井先生に初めてお目にかかることとなった。かくして、私は、櫻井清彦先生に師事することとなったのである。その年の考古学を学ぼうとする新入生は、第一・第二文学部(「一文」・「二文」と略称されていた)あわせると多く、同級生のなかには、大脇 潔(近畿大学教授)、斎藤弘道(茨城県立歴史館)、佐々木藤雄(共同体研究会代表)などがいた。

ここで、その頃の早稲田大学の考古学について触れておこう。当時、早稲田大学考古学研究室は、本部キャンパス8号館地下にあった。この考古学研究室が中心となり、「早稲田

大学考古学会」が組織されていた。学生たちは、考古学研究室内にあった「早稲田大学考古学研究会」という全学的なサークルに属することが多かった。早稲田大学考古学会は、滝口 宏教授を中心として、西村正衛教育学部教授、大川 清(国士舘大学教授)、金子浩昌(講師)、市毛 勲(早稲田実業高校)らがついて、機関誌「古代」を刊行する伝統ある学会であった。早稲田大学考古学会・研究室がいわば当時の早稲田考古学を代表するものとする、文学部内には、考古学研究室はまだ設置されておらず、当時感じた雰囲気からすると、文学部における考古学は早稲田大学考古学研究室や考古学研究会からみると「傍流」ともいえる扱いであった。そんななかで、私は櫻井先生の下、文学部で考古学を学んでいくこととなる。だから、入学して同時に、考古学研究会に入会したものの、熱心な研究会のメンバーとはならずじまいで、徐々に足が遠のいてしまうこととなった。当時の早稲田大学考古学研究会は、馬目順一、江崎 武、平野五郎、原信之らが先輩として会を指導しており、発掘などを通じて厳しい指導を受けることとなる。

文学部での考古学に話を戻そう。入学早々、考古学の何たるかを懇切丁寧に指導してくれたのは、岡田威夫(共立女子高校教諭)さんであった。当時学部4年生で、櫻井考古学の中心的な存在であった。私は岡田さんから本当にたくさんの指導を受けた。だから直接的な師といっても過言ではない。発掘調査はいうまでもないことだが、チームワークが大切であり、それなくしては調査が立ちゆかなくなるわけだが、岡田さんはその輪の中心として活躍していた。こうして、入学早々、初めての発掘に参加することとなった。それは、1965(昭和40)年4月25日のことであった。その調査は、東京都八王子市中野町に所在する中野遺跡(古墳時代の集落が中心)で、中央高速道路建設にともない櫻井先生が団長となって行われた調査であった。当時は、まだ行政機関における埋蔵文化財調査体制が整備されておらず、開発に伴う事前調査は、大学の研究者に依頼して調査団が編成されるケースが多かったのである。こうして授業の合間を縫ってワクワクしながら初めての発掘に参加することとなり、考古学を学ぶ第一歩を歩み始めた。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英一記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 218

一道下遺跡 ～山梨県北杜市須玉町～

生山 優実

今回、私が報告するのは山梨県北杜市に所在する「一道下遺跡」である。

山梨県北杜市は県北西部に位置し、北は八ヶ岳、東は瑞牆山・金峰山を代表する秩父山地や茅ヶ岳、西は甲斐駒ヶ岳が連なる南アルプス山脈と、周囲を山々に囲まれた地域である。約600km²に及ぶ広大な市域には、900ヶ所以上の遺跡が確認されている。近年では大規模圃場整備事業に伴う発掘調査が数多く行われており、新たな遺跡や調査事例の発見が相次いでいる。一道下遺跡も、圃場整備事業に伴う発掘調査の一つである。

一道下遺跡は、北杜市須玉町大蔵地内に所在する、奈良～平安時代の集落跡である。東に塩川、西に須玉川に挟まれた南北に細長く延びる微高地に立地している。本遺跡を含む約52,000m²において圃場整備事業が計画され、令和元～2年に試掘調査を実施した。その結果、工事範囲のうち、約23,000m²に遺跡が広がっていることが分かった。事業者との協議により、遺構が破壊される可能性がある12,400m²を発掘調査、残りを保存することとした。

発掘調査は、令和3年1月から令和4年3月まで実施し、奈良～平安時代の竪穴建物跡136軒、掘立柱建物跡18棟、溝状遺構18条、柵列6列などを発見した。令和4年4月から整理作業を開始し、現在はまだ遺跡を十分に検討できる状況にないため、以下は概報である。

発見された竪穴建物跡は8～11世紀に帰属し、9世紀代のものが主体を占める。一辺5～6mの規模で、大形の建物は一辺8mにもおよぶ。東壁または北壁にカマドが設けられ、建物中央の床面には、地床炉のような円形の焼土痕跡があるものが多い。2～4軒の竪穴建物跡が激しく重複しており、同じ場所に建て替えを繰り返し、長期にわたり集落が営まれていたことが分かる。

集落が営まれ始めた8世紀代の竪穴建物跡は4軒で、56号竪穴建物跡からは円面硯が出土している。試掘調査では、784年～794年の長岡京期の出土例が多い「壺G」の破片が出土していることから、調査区外にもこの時期の遺構が存在すると考えられる。

9世紀前半に帰属する122号竪穴建物跡は、大形建物で、建物内からは高盤や金属製の分銅が出土した。分銅の重さは66.0gで、一斤の約1/10の重さであった。本遺跡からは「斤」「升」「斗」など単位を示す字の墨書土器が多く出土しており、度量衡に関連する遺物が目立つ傾向がある。

9世紀前半の28号竪穴建物跡からは、高盤や布目瓦、杓子状金属製品など、特殊遺物が多く出土した。特に杓子状金属製品は、現在の汁物をすくう“おたま”の形をしている。現在までに、同様の出土例は確認できておらず、一道下遺跡を考えるうえで重要な遺物の一つである。



▲写真1：南側調査区

9世紀後半の42号竪穴建物跡も大形建物で、20点を超える完形土器や金属製紡錘車、山梨県内では3例目となる「焼印」が出土した。焼印は全長約40cm、印面は長さ13cm、幅10cm

で県内では最大である。X線撮影の結果、印文は「斗」であることが分かった。同建物内からは「斗」の墨書土器が複数出土しており、この家を示す標識的な字であった可能性がある。

焼印は牛馬や木器、木製品に用いられたと考えられている。大きさなどによる厳密な使い分けは明確に分かっていないが、『類聚三代格』「延暦十五年(796)二月二十五日」の太政官符には、私牧の焼印は「長二寸、廣一寸五分以下」と規定され、同法量を超えるものは牛馬用の可能性が高いとされている(田中2020)。このことから、本遺跡出土の焼印も牛馬用であった可能性があり、牧との関連が示唆される重要な遺物である。

発見された掘立柱建物跡のうち、13棟が柱穴の一辺が約1mにおよぶ大形建物である。出土遺物が少なく、帰属時期が明確ではないが、9世紀後半の竪穴建物跡に切られていることから、8世紀～9世紀前半の建物と想定される。2間3間、2間4間の総柱建物、2間3間の側柱建物、この他に片庇、二面庇建物が発見された。2間3間の総柱建物と側柱建物は規格的に造られたように、同規模である。遺跡からは、掘立柱建物跡と同軸の柵列と溝状遺構が発見されており、土地の区画に用いられたものと想定される。

この他に注目すべきものとして、黒曜石を用いて祭祀をしたと考えられる遺構がある。9世紀前半の土師器坏が並び、その間には黒曜石が集められ、中央には金属製品が置かれた状態で発見された(写真2)。集められた黒曜石には、石鏃や剥片、石核等が含まれており、平安時代の人々が周辺の縄文時代の遺跡から黒曜石を拾ってきて供えたような印象を受ける。同様のものが、もう1組発見されている。いずれもこの正面に富士山、背後には八ヶ岳が直線上に見える位置にあり、地鎮など何か特別な意味を持つと考えられる。



▲写真2：遺物集中区

以上、発掘調査の結果から本遺跡は8～11世紀の集落跡であることが分かった。遺構は全時期を通して重複が激しく、長期間にわたり集落が営まれたことが伺える。建物の主体を占める8～9世紀には、柵列や溝によって区画された範囲に掘立柱建物や竪穴建物が配置されていたと想定され、主軸方向が異なるものがあることから、時期の異なる複数の区画が存在すると考えられる。

10～11世紀には遺構数が減少し、集落の中心は他所へ移動したと想定される。

本遺跡では、焼印や分銅、杓子状金属製品、高盤、布目瓦など、特殊な遺物が多く出土した。これらの出土遺物や遺構から、一道下遺跡はこの地域の有力者が治めた、拠点的な集落の可能性が高い。今後、整理作業と分析を進め、集落の性格を慎重に見極めていく必要がある。

参考文献：

高島英之 2021「コラム」焼印「馬と古代社会」

田中弘明 2020「牛馬に用いた焼印」『大正大学考古学論集』大正大学考古学論集刊行会

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは細川剛史さんです。

考古学者の書棚

「ネアンデルタール人は私たちと交配した」

スヴァンテ・ペーボ 著(野中香方子 訳) / 文芸春秋(2015)

浪形 早季子

考古学は良い学問だなと常々思うことがある。それは多くの協力者たち、時にそれは様々な分野の専門家の協力を得、そうして成り立つ学問だからである。一方で、それは、意見の食い違いなど、上手くいかない側面もはらんでいる。しかし、自分たちでは思いもしない側面からの意見や発見は非常に楽しく刺激的である。

本書は著者スヴァンテ・ペーボの自叙伝でありながら、古代DNA(Ancient DNA)研究について詳細に書かれた一冊である。今やDNAは私たちにとってかなり身近な存在である。近年では自分の体質、例えば何を多く摂取したら太りやすいかなど、DNA検査はダイエットにまで及んでいる(やや高額だが、私も調べようかどうか検討中)。その進展は素晴らしい、1984年にヒトゲノムプロジェクトがスタートし、本格的な解読作業が1991年より始まり、2000年6月26日にはドラフト(概要)ゲノムの解読終了が公式に宣言、2003年4月14日には全ゲノムが解読完了となった。著者のペーボもこのヒトゲノムプロジェクトと歩みを共にするかのよう古代DNA研究に取り組んできた。昨今のコロナ禍でPCR(ポリメラーゼ連鎖反応)という単語もずいぶん耳慣れた単語になってきたが、このPCRについても最先端の解読技術を取り込んでいく様子と共に描かれており、耳学問な私にとっては、非常に勉強になった一冊である。ちなみにこれ以上専門的な本や論文だとキャパオーバーを起こしかねないので、ちょうど良い本である。

ペーボは面白い経歴の持ち主である。幼少期に古代エジプト学に興味を持つものの、大学では医学の道に進む。大学での医学の勉強を終えた後、臨床医になるべきか迷ったものの、研究室に入り、分子生物学の研究を続ける。ところがそこでこっそり子牛のレバーのミイラを作り、ミイラの中のDNA分子の残存を調べた。まだそのような古いものにDNAが残っているとは誰も想像しなかった頃である。しかし、ペーボはミイラのDNAを見つけ論文を発表したのだ。残念ながらそれは後に現代人のものであったことが判明した。こうした失敗もあり、古代DNA研究での最大の課題である、混入したDNAをいかに取り除くか、技術面に関する説明を本書の中でもかなり丁寧に行っている。古代DNA専用のクリーンルームで細心の注意を払い抽出しても不十分で、気が付けば混入の心配と化学薬品の検査に明け暮れている時代もある。様々な工夫をして混入したDNAを締め出し、地道に問題を一つずつ解決していく姿には感服である。

こうした苦心の末、ペーボはネアンデルタール人のゲノム解析、デニソワ人の発見など、華々しい功績を打ち立てる。マックス・プランク進化人類学研究所のニュースは耳にした方も多いだろう。さぞかしお金をかけて、世界の知性を集めているのだろうと思っていた私は、この本でペーボの地道な

研究人生を読み、とても反省した。また時系列を追って書いてあるため、ネアンデルタール人のゲノム解読レースなどはとてもスリリングでハラハラさせられ、読み物としてもとても楽しい本である。たまに少しひっかかる考古学や従来の人類学よりも分子生物学の方が勝っているかのような表現も、ペーボがこの分野を牽引し、時に試料を手に入れる際に起こる他分野の研究者との軋轢があつてのことであろう。考古学は掘ってみなければわからない側面が多い。また掘っても、初めてのものに対しては、誰かご存知の方いませんかーと常に探求していく学問であり、これには多くの人の協力が必要なのである。考古学者はディレクター的立場で多くの人の意見を聞き、協力を得なければいけないのである。ペーボのような新しく革新的な分野の研究者ともである。本書では様々な分野の登場人物と共に、著者との人間関係が詳細に描かれており、非常に興味深い。

本書の内容は題名にもあるように、ネアンデルタール人と現生人類は交雑、つまり性交渉をもっていたかどうか大きなテーマになっている。著者に言わせると、セックスしたかどうかの問題ではなく、私たちホモ・サピエンスの中にネアンデルタール人の遺伝子が残っているかどうか大きな問題なのだという。化石も見ても解けなかった謎が、ネアンデルタール人のゲノムを明らかにすることで、現生人類の中にネアンデルタール人の遺伝子が入っていることを突き止めたのである。ホモ・サピエンスとネアンデルタール人の男女関係だなどと書くと急に軽いものに思えるかもしれないが、遺伝子が残っていたと言われたら、私たち考古学を学ぶ者はその先を考えたくなくなってしまう。両者は争わず、交流し、文化的交流や物々交換、果ては交雑まで起きていたというのだろうか。

違う種が一緒にいるということはどういうことなのだろうか。つい先日、標本を見せてもらいに行った先で、鯨類の群れの中に他種が混じる例を動物学の専門の方から耳にした。採餌行動をはじめ、生態が相当類似しないところした群生行動は厳しいのではないかと単純に思ってしまう。しかも、教えてもらった例は体格もかなり違う2種だ。そんなことをふと考えながら、ネアンデルタール人と現生人類、両者の交雑は未知なるものへの出会いという私たちの知的好奇心の結果なのだろうか。まだまだ謎はつきない。そして他分野との異種間交流はやはり面白く刺激的だ。

アルカ通信 No.225

発行日	2022年6月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp